

『玲』二十九号への手紙

—「友を偲んで一篇」

蓬田澄子

宗内 敦 先生

本日、待望の『玲』が届きました。先生からの温かいお手紙も頂戴しました、とても嬉しかったです。

届いたときは、ちょうど(またもや)長男への「お小言」の最中でした。一時休止をしてお手紙を拝読し、急に機嫌が悪くなった私に、長男は怪訝そうな顔で「どうして急に優しくなったの??」「オペラント条件付け・・・などなど子育てに活かせる学問を学んできたのに、何一つ活かせていないようにも思えます。夫の言葉に反論できないのは、そのためなのでしょね。

届きましたピカピカの御本を見て、次男は「キレイ(に)になった!昭仁(次男の名前です)ばっちいしたの(汚してし

まったのに!)」と目を丸くしておりました。

掲示板では残部僅少とおっしゃっていましたね。先生のお手元にある、貴重な宝物だったのでないでしょうか。ありがとうございます。大切にします!

頂戴しましたもう1冊は、赤羽さんのお母様にお送りさせて頂きたいと思えます。

先生が今でも赤羽さんのことに触れてくださること、どんなに喜ばれることでしょう。

師走も半ばを過ぎました。ご多忙の先生ですが、ゆつたりと新しい年をお迎えになられますことをお祈りしております。どうぞ、御身体をお大切に。

備考 編集者記 メール追記に、友を偲んで思わずその心情を投影する短編小説を書いた、とあった。私にとっても、教え子を偲ぶ記念碑ともなるべき一篇と思い、乞うてそれを掲載させて頂くことにした。(宗内)

「友を偲んで一篇」

早朝、居間で電話が鳴り出した。

かすかに聞こえるその響きは、ここ数日浅かった眠りを覚ますには充分だった。

お母さん、その電話、出ないで!心の叫びは母には届かない。母が応対している声がする。

私は静かに身を起こし、部屋の入り口をじっと見つめた。

階段を駆け上がる足音が近づいてくる。「起きなさい!文恵さんが亡くなったって!」

それは、かけがえのない親友を、永遠に失った瞬間だった。

文恵が脳出血で倒れたと、文恵の母から知らされたのは、1週間ほど前のことだった。受話器を持つ手に力が入り、喉はカラカラに乾燥していた。その後どう電話を切ったのか覚えていない。全身がガタガタ震え、立っていられなかった。軽いめまい

がした。私は、何が起こったのかをわからずにいた。

文恵とは、山梨にある大学の3年生になった春に、心理学の研究室で出会った。気の置けない間柄になったのは、キャンパスを彩る桜が散るより前のことだった。

やがて夏が来た。その年の夏は、記録的な猛暑だった。北国育ちの私にとって、体温を超える連日の暑さは、ことさらこたえた。食べ物は一切受けつけず、水分だけが喉を通っていった。もはや、大学に行く気力さえもなかった。

アパートでくつたりしていると、文恵が訪ねてきた。「フルーツみたいなもんだからさ、頑張ってるよ。冷やしてきたからおいしいよ」

そう言って手渡してくれたのは、真っ赤なミニトマトだった。受け取った手に、ひんやりとしたトマトが心地良かった。よく冷えたトマトは、びっくりするほど甘く、おいしかった。

「長野にいる父が趣味で作っているの。」

私、一人暮らしなのにこんなに送られてもねえ。久美が食べてくれるから助かるよ」

そんなことを言いながら、文恵は毎日トマトを届けてくれた。それはまさに、私にとって「命のトマト」だった。

翌年、4年生になり卒論提出を2カ月後に控えた11月、文恵が泊まりこみで論文を書きにやってきた。

因子分析のためのパソコンを交互に使いながら、夜中まで論文を書き、早く起きたほうが朝食を作り、揃って大学に出かけた。私たちは毎日一緒に過ごした。どちらかに仮定どおりの分析結果が出て、小さな祝杯をあげながら夜明けを迎えたこともある。

お互い卒論を無事に提出し、文恵が去っていったあとは、広く感じるその空間に慣れるのに時間がかかった。卒業が間近に迫っていた。

「文恵が倒れた」との電話のあと、東京行きの夜行バスに飛び乗り、松本駅に着いたのはお昼過ぎだった。駅から病院に直行

した。

文恵の面会時間は1日2回、しかも家族のうち1人だけが、わずか15分の間許されているのみだった。その貴重な15分を、私たちはとくに覚悟はしている。それでも久美さんが会ってくれることで僅かな奇跡を信じたい」と、文恵の両親が与えてくれた。病院には、妹だと偽った。

着替えや消毒を終え、いくつもの扉をくぐり抜けた。その奥に、文恵は眠っていた。卒業以来の懐かしい顔がそこにあった。思わず握った手は、はつとするほど温かかった。しかし、半年ぶりの再会の喜びはすぐに消え去った。

そのとき私は、文恵が今どういう状況なのかを、やっと理解しはじめていた。文恵はもう、自力では呼吸していなかった。無機質な機械音だけがICUの中に鳴り響いていた。これが、文恵との最期の別れになりそうなのを感じた。が、悲しみはわいてこなかった。私はただ呆然と現実を打ちのめされ、立ちすくんでいた。握りしめたその手を、ずっとならずと離したくはなかった。

次に会ったとき、文恵は棺の中にいた。仕事の都合で夜に着いたため、お通夜はずでに終わっていた。静かな家に、文恵の両親のほかに誰もいなかった。透きとおるような秋の虫たちの声が、やけに大きく感じられた。

小さな窓の向こうで、文恵が微笑んでいた。文恵が倒れて以来しまい込んでいた涙が、一気に溢れ出た。棺にしがみつき、声をあげて泣いた。白い棺は涙の分だけ色を変え、ほのかな香りを放った。どんなに泣いても、泣けば泣くほど、悲しみは増すばかりだった。

「久美さん、この地方のお通夜の慣わしで、供養になりますから召し上がってください」

どのくらい泣いたのだろう。文恵の母が、小さな俵型に固めたご飯を差し出してくれた。震える手で口に運んだが、唾液など一滴も出なかった。無理矢理お茶で流し込みながら、「きつと涙で使い果たされたからだ」そう思うと、また新たな涙がわいてきた。

翌日は告別式だった。葬儀は旅立った者ではなく、遺された者のためにあるに違いない。ぼんやりとそんなことを考えていた。一連の儀式で客観的に「死」を認め、この世に存在していた今までと、存在しないこれからに線を引きだ。まわりがすすり泣く中、お別れの言葉だけはしつかり伝えられた。涙をぐっとこらえて弔辞を読んだ。

「悲しんではなりません。『死』ではないのです。仏様は『永遠の命を得た』のです」

和尚さんの言葉が心に沁みだ。文恵はいつも一緒にいる。私は本気でそう信じていた。それだけが、唯一の救いだった。

日常生活に戻ったあとも、文恵のことばかり考えていた。生ごみの効率のよい水切りの仕方や、浴室での充実した過ごし方、テレビで目にする芸人の将来性・・・文恵とよく、たわいもない議論をした。思い出はいたるところにあふれていた。

「文恵、聞いて。私ね、とても辛いことがあったの。親友を亡くしちゃったんだ。今回はかなり耐えられそうにないよ。文恵、

どうしたらいい？・・・」

慰め、励ましてくれるはずの文恵はもういない。「文恵、肝心なときにあなたがいないなんて・・・」怒りにさえ似た悲しみがわいてくる。

普段どおり振る舞ってはいたが、お葬式の際に仕事を休んだこともあり、中には声をかけてくれる人もいた。「早く立ち直って」「早く元気になって」、それらの言葉を、素直に感謝することができなかった。

「立ち直る」という言葉には「元通りになる」というニュアンスが感じられた。確かに、文恵が亡くなった日はほとんどん過去となっていく。しかし、今ここに文恵がいなという事実は、永遠に現在進行のままなのだ。それなのに忘れろというの！？

慰めなど要らなかった。私は頑なに周囲の優しさを拒んでいた。

ただ、悲しんでばかりもいらなかった。一段落した文恵の母から、毎日のように電話がかかってきた。事情を知る母は、食事中等であるが睡眠中であるが、はたまた入浴中であるが、受話器を抱えて走ってきた。

「久美さん、どうしてあの娘は死んだの？私がそんな身体に産んでしまったせい？」あの娘のこと、一秒たりとも頭から離れないの。私、おかしくなったの？病院に行ったほうがいいかしら？」「お父さんの夢には出てくるらしいんだけど、私のほうにはあの娘、ちつとも出てきてくれないの。きつと私のことを恨んでいるからね」

たった一人の我が子を突然失って、平然としていられる親がいるだろうか。夢を見ないのは、おそらく眠れていないからに違いない。胸がはり裂けそうだった。しかし私にはただ黙って、文恵の母が泣くのを受け止めることしかできなかった。

一年後。

文恵の命日に、松本を訪れた。

少しやつれた感じではあったが、文恵の母には笑顔が戻っていた。

「まあ、久美さん！遠いところありがとう、疲れたでしょう。最近、ガーデニングに凝っているのよ。庭でとれたハーブティ、召し上がって」

私は、レモングラスの香りに心を温めながら、文恵の母がインターネットとデジタルカメラの趣味を始めたこと、全国にガーデニング仲間ができたこと、デジカメの画像をやり取りしているうちに、ついにホームページまで開設したことを聞かされた。

悲しむ暇がないほど毎日が忙しいの、文恵の母はそう言って笑った。

そのとき、先ほど挨拶を交わした文恵の父が戻ってきた。手にはボウルいっぱいミニトマトが輝いている。「あつ、そのトマト！」思わず声が出た。

「文恵を失ってから、何もする気が起きませんでした。でも、ふと思いつき、久美さんに食べてもらおうと育てました。摘みただだから、いつそうおいしいですよ」

「そうそう、おとしの夏だったかしら。久美さんに食べさせるからうんと送って、文恵が。私たちも嬉しくて、毎日赤くなつたのを探しては、どんどん送ったのよ」

口数の少ない文恵の父が、目を細めてうなずいている。ここにも文恵がいた。

夕食の前に、文恵の母に案内され、文恵に会いに行った。

りんご畑の横の小道を通った先に、文恵のお墓があった。真新しい墓石が、悲しく目立つ。無言で手を合わせた。私は確かに文恵を感じていた。

「文恵、安心して。ご両親はきつと大丈夫」

小さな声で文恵に伝えた。

帰り道。細い小道は、二人並んでは歩けない。「親より先に死ぬことが、最大の親不孝よね」背中から流れてくる文恵の母の言葉に遅れないようにしながら、私は一瞬立ち止まり、お墓を振り返った。何故だか涙がわいてきた。だが、ここで泣くべきではないと思った。ぎゅっと目を閉じ、それからぐいと青空を見上げた。さわやかな秋の風が、瞬く間に涙を乾かしてくれた。私は気づかれないように、慌てて文恵の母の後を追った。

その夜、お風呂上がり巨峰をつまみながら、文恵の母は生まれてから高校までの、私は大学での文恵の思い出話をした。

「久美さん。私ね、今だって文恵を亡くしたことで、納得していません。悔しくて諦められなくて、眠れない夜もある。でも、私たち夫婦は生きなければならぬ。文恵とあの世で再会したときに文恵に叱られないような生き方を。その思いが、今の生きる支えなんです」

文恵の母の言葉には、しっとりとした重みがあった。

文恵が亡くなって一年が過ぎ、最近では文恵のことを思い出さない日も徐々にでき始めていた。しかしそのことに気づいたとき、私はいつも激しく自分を責めた。思い続けることで、文恵は生き続けるのだから。文恵を思っている限り、文恵はそこに存在するのだから。文恵を思い出さないことは私にとっては罪であり、恐怖でもあった。

文恵の母が、私の心を見透かしたかのようにつづけた。

「文恵のこと、たまにでいいから思い出してやってくれませんか？それが、あの娘が確かに『生きていた』という証だから」
亡くなった者には亡くなった者の、生きている者には生きている者のそれぞれの時

間が流れるのだ。両者の性質はもともと異なるものであり、それを無理に重ねようとして苦しんでいた自分に気づいた。
話すことはたくさんありすぎた。私たちは夜更けまで語り合った。

翌日、長野駅まで送るので帰りは是非、と文恵の両親に勧められ、初めての長野新幹線に乗り込んだ。発車してしばらくは車窓からの景色を楽しんでいたが、いつの間にか電車の窓に頭を傾け、うつらうつらとしていた。

ガタン！

どこかの駅に停車したようだ。車内アナウンスが、軽井沢に到着したことを告げている。「とても素晴らしい景色なんですよ」と文恵の両親が教えてくれた駅だ。目を開けると、窓枠いっぱい切り取られた浅間山が広がっていた。曇天の下、まるで関係なく生命力にあふれているように見える。

「きれい……」

私はそっと目を閉じた。心の中で文恵につぶやく。

「これから先、あなたのことを思い出さない日が多くなるかもしれない。あなたを思い出す機会がどんどん少なくなっていくかもしれない。だけど、わたしはあなたを忘れない。絶対に忘れない！それで……いいよ、ね？」

そのとき、さーっと日の光が差し込んだのが、臉を通してでも感じられた。私にはそれが、文恵からの返事に思えてならなかった。

やがて、心地よい振動とともに、電車は再び走り出した。閉じたままの臉から、静かに涙が流れた。

「お元気ですか？ 長野の母より」

パソコンに届いたメールを開くと、デジタルカメラで撮影した鮮やかなトマトの映像が飛び込んでくる。

「今年もおいしいトマトができましたよ！」

「はい！次の三連休に伺います！」

それが、ここ数年の合言葉になっている。